

母親の言語入力の子どもの年齢推移と子どもの言語発達

○小椋たみ子¹・浜辺直子[#]・平井純子[#]・増田珠巳[#]
(¹帝塚山大学)

目的：養育者が子どもと注意を共有し、子どもの興味のある対象についての言語的情報を提供する発話は、子どもの語彙獲得を促進する。子どもの言語発達に有効な母親の言語入力は子どもの年齢、言語発達のレベルにより異なり、18ヶ月以前では、養育者の応答性（即座性、随伴性、適切さ）が語彙発達を促進し（Bornstein et al, 1999; Tamis-Lemonda et al., 2001）、21ヶ月では、母親の語のタイプの多さやMLUにみられる発話の複雑さが、子どもの後の語彙獲得と正の相関があることが報告されている（Hoff and Naigles, 2002）。本研究では言語出現期から文法出現期の子どもへの母親の言語入力を明らかにし、子どもの言語発達との関係を明らかにする。

方法：**対象児**：赤ちゃん研究に応募してくれた91名（9ヶ月25名（男児12名、女児13名）、12ヶ月児23名（男児13名、女児10名）、18ヶ月児23名（男児14名、女児9名）、21ヶ月児20名（男児11名、女児9名））。**手続き**：大学の観察室で母子の一定のままごとと遊具での自由な5分間の遊びを2方向より録画した。**分析**：**1. 母親の言語行動の分析**：**1）発話数**：5分間に母親が発した全発話数。**2）方略（follow/lead）**：子どもがすでに注意を向けている事物、事象、活動にそったfollow発話数、子どもの関心以外の事物、事象、活動に向けさせようとするlead発話数、その他（follow, leadに分類不可）に分類した。**3）発話機能**：①呼びかけ、②質問、③指示・命令、④提案、⑤命名、⑥説明（形状・状態・動作などについての説明）の発話機能を取りあげ、出現頻度を算出した。**2. 言語指標**：母親へ日本語版マッカーサー乳幼児言語発達質問紙への記入を依頼した。9-18ヶ月は「語と身振り」版の理解語彙数、表出語彙数を、21ヶ月児は「語と文法」版の表出語数、文の複雑さ得点、最大文長を算出した。**3. 信頼性**：各年齢4名のデータ、計16名についての2名の評定者のkappa係数は方略の平均が.95、6つの発話機能についての平均は.92であった。

結果：**1. 母親の言語入力**：**1）5分間の母親の発話総数の平均(SD)**は9ヶ月99.4(39.1)、12ヶ月130.0(30.5)、18ヶ月130.6(39.6)、21ヶ月126.5(34.8)で、9ヶ月が12、18ヶ月に比べ有意に低かった。**2）母親の発話カテゴリ**：年齢を個人間要因、方略（follow/lead）と6つの発話機能の出現頻度を個人内要因として繰り返しの分散分析を行った結果、発話機能、方略、発話機能×年齢、発話機能×方略、発話機能×方略×年齢に有意な差があった。年齢の主効果はなかった。follow発話はlead発話よりも有意に出現頻度が高く、発話機能の出現頻度は説明>呼びかけ>質問>指示>提案>命名の順であった。発話機能×方略の二次の交互作用が有意で($F(5, 435)=112.9, p<.001$)、followでは説明が、lead発話では呼びかけが第1位であった。発話機能×方略×年齢の三次の交互作用も有意で($F(15, 435)=3.962, p<.001$)、followでは、質問の出現頻度は18ヶ月が9ヶ月、12ヶ月よりも、21ヶ月が9ヶ月よりも有意に高く、指示命令は18ヶ月、21ヶ月が9ヶ月よりも有意に高く、命名は12ヶ月が21ヶ月よりも有意に高く、説明は18ヶ月が9、12ヶ月よりも有意に高かった。leadでは、指示命令で21ヶ月が9ヶ月よりも有意に出現頻度が高かった。

2. 母親の言語入力と子どもの言語発達の相関：母親lead発話では子どもの言語測度と有意な正の相関があった発話機能はなく、有意な負の相関があった発話機能は12ヶ月のlead呼びかけと語彙理解(-.485)、語彙表出(-.414)であった。母親follow発話では有意な負の相関があった発話機能はなく、有意な正の相関があった発話機能は9ヶ月児のfollow呼びかけと語彙理解(.495)、12ヶ月のfollow質問と語彙理解(.414)、18ヶ月ではfollow質問と語彙表出と正の相関(.487)があった。21ヶ月ではfollow指示命令と子どもの最大文長の間に有意な相関(.489)が見出された。

結論：母親の発話は全年齢を通して子どもが注意を向けている事物、事象や活動にそったfollow発話がlead発話より出現頻度は高く、follow発話では説明、lead発話では呼びかけの出現頻度が高かった。また、年齢による違いも見出され、18ヶ月の語彙急増期、21ヶ月の文法出現期では子どもの注意、関心にあわせた質問の出現頻度が説明の次に高かった。言語発達との関係は、子どもの注意にそっていない呼びかけは12ヶ月では語彙発達と負の関係が、注意にそった呼びかけは9ヶ月で語彙理解と正の相関が、12、18ヶ月で子どもの注意にそった質問は語彙発達と正の関係があった。共同注意状況での母親の言葉かけの重要性が確認された。付記) 科研基盤(C)、帝塚山大学特別研究費の助成で実施された。